

2024.12.19



地域日本語支援ニュース こだま 第 450 号

ともに生きる

～地域で、日本で、そして世界で～



★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部： <https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

---

## ■ともに生きる：さいたま市より■

「Can do」という考え方が地域の日本語支援の現場でも、少しずつ広がりつつあります。今回は活動の一例として、さいたま観光国際協会国際交流センター主催「はじめてのにほんごこうざ」をご紹介します。さいたま市総括コーディネーターの石川信雄さんには開講に至る経緯から今後の展望も含め、お話をうかがいました。

※「Can do」についてはこだま 448 号（2024 年 10 月 17 日配信）でご紹介しています。

---

さいたま国際交流センター「はじめてのにほんごクラスこうざ」

「Can do」を意識した日本語講座

### ◆きっかけは外国人住民の変化

「やはり最近、外国人住民、とくに日本語が全くわからない外国人住民が増えてきたことがきっかけでしょうか。この方々に対しては日本語を教える機能をもった教室を作っていかなければならないと思ったんですね。」 今秋から始まった「はじめてのにほんごこうざ」開講の理由について、さいたま観光国際協会国際交流センター（以下「センター」）の総括コーディネーター石川さんはこう説明する。

センターは長年、多文化共生に向けてさいたま市の国際交流・支援協力活動を行うなかで、地域の日本語ボランティア教室と協力してきた。さいたま市

のボランティア教室は15以上もあるが、そのほとんどが交流活動を意識した教室で、外国人住民にとっては日本人と日本語でおしゃべりしたり、生活相談をしたりできる地域の拠り所（よりどころ）となっている。そこへ「日本語が全然話せないのを教えてほしい」という外国人がたびたび教室を訪れるようになった。しかし、気もちはあっても日本語ゼロレベルの方へ教えるのはハードルが高いというボランティアからの声があるという。また、地域の交流を中心に活動してきた教室が「教育」をどこまで担うべきか、あるいは担ってよいのか、という戸惑い（とまどい）もある。

そんな状況に対し、センターでも「日本語支援について、いつまでもボランティアばかりに頼るという姿勢を改善していく必要がある」と考えたという。「せっかくさいたま市に来てくれたのだから、外国人が日本人といっしょに市民の一員として生活していけるようにしたい。そのためには生活に必要な日本語力をつけることが第一歩で、その支援を行政といっしょにしていかなければならない。」 ボランティア教室のような日本語による交流の場とともに、日本語ゼロレベルの方のための日本語習得の場を提供することも必要だ。こうして誕生したのが 「はじめてのにほんごこうざ」なのである。

#### ◆日本語支援システム構築に向けた歩み

センターではすでに令和3年ごろから文化庁の地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業として、行政とともに連携し、新たな体制作りに向けて動きだしていた。令和4年度には総合調整会議を設立し、その後はこの会議を中心に地元の実情に合わせた地域の支援・体制作りについて討議を重ねてきた。

「はじめてのにほんごこうざ」はそのなかで生まれた事業のひとつだが、そのほかにも、やさしいにほんごの講座と地域の教室向けに教室作りのための研修、あわせて3つの講座が本年度から新たに開始されているという。

この体制を総括コーディネーターの石川さんとともに支えるのは4名の地域日本語教育コーディネーターだ。みな地域の日本語支援・教育現場の代表や日本語学校の経営者など地元の事情にも精通するベテランの日本語教育専門家である。総括コーディネーターは行政と現場との橋渡し役として、彼らと綿密に連絡・相談しながら行政の方針に基づき課題をまとめていく。

#### ◆「はじめてのにほんごこうざ」

こうして生み出された「はじめてのにほんごこうざ」は、講師やカリキュラムについての考え方もこれまでのボランティア教室とは一線を画す（いっせんをかくす）。講師の応募条件には日本語学校と地域のボランティア教室両方の経験者であることを加えた。クラスは1回2時間で全18回（週2回）、対象

となる受講者は日本語を初めて勉強する 16 歳以上のさいたま市在住外国人。一人ひとりに丁寧な対応ができるよう募集者数も 10 人に絞った。

カリキュラムは生活の中で日本語が確実に使っていけるよう意識して「生活 Can do」を取り入れた。『いろいろ 生活の日本語』（国際交流基金）のテキストをベースに毎回トピックとそれにあわせた Can do を取り上げる。ただしテキストのままではなく、講師がそれをもとに学習者の状況や環境にあわせ、内容を考えることを大切にしているそうだ。

クラスを見学させていただいた。親子や友達同士で参加している人もいるが、皆オープンで和気あいあいとしたムードだ。担当講師の方以外に地域日本語教育コーディネーターの方も参加し、手厚いサポート体制が感じられた。

講師に「Can do」の導入で何に気をつけているか聞くと、まずは最終ゴールである「Can do」を明確にすること、そして、そこに至るまでの道すじのなかで小さい行動タスクを順番に積み重ねていくことを心がけているというお話だった。見学の日は「家と職場」の 2 回目で、必要な物、人がどこにあるか、いるかについてやりとりできるようになることが目標だったが、学習の初めにまず今日の目標「Can do」をみんなで確認し、教室での学習後、センターのフロアや下の階にある図書館などを実際に巡りながら学んでいた。講師は物や人を示しながら語彙・表現を導入、質問する。学習者も自動販売機の前で「すみません。お茶はどれですか」。廊下で「ミーティングルームはあそこですか」などと尋ねあう。講師の前述の言葉通り、小さな行動をくり返していくうちに実際にことばが使えるようになっていく。クラスの最後には目標の「Can do」が達成できたか各自で自己評価（チェック）を行った。

講座後、学習者に感想を聞いた。受講前は全く日本語が話せなかったという 2 人組の学習者は、とても活動的なクラスでたくさん話すので、日本語もずいぶん使えるようになってきたと喜んでいて。また、国際結婚をしているという受講者は、すでに交流型の日本語教室にも通い、ある程度日本語に触れているが、今回の学習は新鮮で、自分の日本語が整理されていく感じがするとのことだ。「Can do」での学習は目標がはっきりしたかたちで示されるため学習者にもわかりやすく、日本語で何ができるようになったかを実感できて自信もつくようだ。

#### ◆さらなる充実を

石川さんは言う。「体制としては真ん中に交流の場としての日本語ボランティア教室があり、その周りに今回のような、生活日本語をきっちりと学べる日本語講座や、さらに学びたい人のための日本語学校など、いろいろなかたちで日本語を学べる場所があり、それがお互いに連携できているというの

が望ましいですね」。学習者は必要に応じてどれを選択してもよいし、同時にふたつに参加してもよい。例えば「はじめてのにほんごこうざ」で学んでみて、少し自信がついてきたら地域のボランティア教室のおしゃべりに参加するといった具合である。希望する学習者をボランティア教室とうまくマッチングしていくのもセンターの役割だ。

学習者だけでなく、ボランティアへのバックアップも大切だ。今回のような教室に興味のあるボランティアの方もいるので、初期の学習者への教え方研修会なども開き、交流型の教室でも支援ができるようアドバイスしていきたいそうだ。まだ講座は終了していないが、すでに「年2回開催できないか」「さいたま市の他の地域でもやってほしい」などの要望が各所から寄せられているという。「全講座終了後は課題も抽出（ちゅうしゅつ）したうえで、継続的に、そして多角的に今後へつなげていきたいですね。」地域の教室と行政、さらに日本語学校も協力し合い、在住外国人が日本語で生活しやすい環境がさらに整っていくことを期待したい。

（編集委員 小瀧）

さいたま観光国際協会国際交流センター

<https://stib.jp/international/about/>

はじめてのにほんごこうざ

<https://stib.jp/international/lecture/3479/>

---